

都市と旅行者

十九世紀前半のオリエント旅行記における 都市空間の現れ方に関する一論考

畑 浩一郎

「目」と「足」

「コンスタンチノーブルは目の快楽のために作られたようだ¹。」オスマン帝国の首都を訪れた旅行者の多くが、1819年にフォルバン伯爵が発したこの言葉に首肯したはずである。十九世紀の前半、この都を訪れるのに最も一般的なのは、エーゲ海からダーダネルス海峡に入り、マルマラ海を抜ける海の道であった。途中、船から見える景色は単調で面白味に欠ける。岸边のみすぼらしい風景は、何ら、名高い都が目前に迫っていることを感じさせない。突如船が左へ舵をきる。コンスタンチノーブルがその圧倒的な偉容とともに旅行者の眼前に現れるのは、まさにこの瞬間である。船がスルタンの宮殿の下を通過するや否や、千五百年の歴史を持つ古都は、アジアとヨーロッパの二つの文化が入り交じったその壮麗な姿を一挙に開示するのである。アレクシス・ド・ヴァロンはこの時の驚きを次のように表現している。

以前ある旅行者が、後宮の前を通過するとき、感激のあまり激しい熱の発作を起こしたと聞いたことがある。私は何度となくこの話を笑ったものだが、自分自身が七つの塔の城の前に至ったとき、それはまさにあり得べきことに思えた²。

旅行者の印象は、それまでの風景が平凡であっただけにますます強烈なものとなる。何もない場所から、忽然と優美な大都市が姿を現わす様は、まるでアラビアンナイトの世界にいるかのようなのである。

しかしオスマン帝国の首都が旅行者に用意している驚きはそれだけにとど

¹ Louis-Auguste Forbin, *Voyage dans le Levant*, Imprimerie royale, 1819, p. 15.

² Alexis de Valon, « La Turquie sous Abdul-Medjid – II – Constantinople », *Revue des deux mondes*, 15 octobre 1845, p. 183-184.

まらない。波止場に上陸する旅行者は、船から一步下りるや否や、新たな茫然自失に捕らえられることになる。周囲の景色はまたしても一変しているのである。先ほどの目を奪うばかりの壮麗さは消え失せ、代わりに途方もない不潔さ、惨めさ、貧しさが町を支配している。舗装のない道は狭く、くねくねと曲がりくねってまるで迷路である。木製の家はみすばらしく、湿気のせいであちこちが腐っている。往来の真っ只中で肉屋が羊を解体しており、血や内臓の臭いが胸をむかつかせる。この突然の風景の変化は、最初に都市が出現したときに勝るとも劣らない強烈な驚きを旅行者に与える。ヴァロンは、コンスタンチノーブル上陸の瞬間の印象を次のように語っている。

頭から足まですぶぬれになって立ち上がると、一瞬動くことができず、驚愕のあまり凍り付いた。私の周りで全てが一変していたのだ。魅惑的なパノラマは消え去っていた。私は、不潔この上ない小さな十字路に立っており、そこはじめじめとして暗く、泥まみれの小道が織り成す迷路の入り口に当たっていた³。

外から眺める分にはあれほど壮麗に見えた都市が、一歩中へ足を踏み入れた途端、この世のものとは思えない醜悪さを露わにする。コンスタンチノーブルに到着する旅行者は、その外と内のコントラストによって、まるで全く異なる都市へたどり着いてしまったかのような幻覚を覚えることになる。

旅行者が、フォルバン伯爵の言葉を真に理解するのはまさにこの瞬間である。伯爵は、コンスタンチノーブルは目の快楽のために作られたようと言った。しかしその言葉は、ただ都市の外見の美しさを強調しているだけではないのではないか。そこには、内部があまりに醜悪であるため、この都は外から眺めるだけで満足すべきであるという警告が込められていたのではないか。このように考える旅行者は決して少なくない。実際、多くの旅行者の意見をよりよく代弁させるよう、伯爵の言葉を次のように修正するマルシェベウスのような旅行者も現れてくる。

ある巧妙な旅行者の言葉を借りれば、コンスタンチノーブルは目の快楽のためにだけに作られているのだ。しかし目は人間の全てではない。それゆえどんなに疲れ知らずの観察者であっても、いずれその仕事に飽き飽きすることになる⁴。

³ *Ibid.*, p. 186.

⁴ Marchebeus, *Voyage de Paris à Constantinople par bateau à vapeur*, Bertrand-Amiot-Marchebeus, 1839, p. 181-182. 傍点(原文ではイタリック)はマルシェベ

結局のところ、トルコ帝国の首都の魅力は、他のどの西洋の都市も及びもつかない外側からの眺めにあるのであり、ひとたびその内部へ足を踏み入れれば幻滅しか感じ得ない。これがコンスタンチノーブルを訪れる旅行者の一般的な感想であり、その内面と外観の際立った対照は、多くの旅行記作家によって頻繁に言及される、紋切り型の話題となっている。

ところが、このような意見に対して敢然と異議を申し立てる旅行者が一人いる。1844 年から翌年にかけて最初のオリエント旅行を行ったマクシム・デュ・カンである。『オリエントの思い出と景色』の中で、彼は次のように、ステレオタイプ化されたオスマン帝国の首都のイメージに反駁している。

多くの本の中で、コンスタンチノーブルの内部は醜く不潔であると書かれている。それは間違いである。どんな道の片隅にも独自の景色があり、どんな家にも驚嘆すべき点がある。不平を言う人々は、スタンプールの無数の小道に對峙してみる勇氣を持たなかったのである⁵。

一般的な旅行者の意見と真っ向から対立するこのデュ・カンの主張をどのように解釈するにせよ、少なくともそこに一つの真実が含まれていることは認めなければならない。その真実はあまりに平凡であるがゆえに、今さら指摘するのも馬鹿げて見えるかもしれない。しかしそれは確かにオリエントでは考慮するに足る真実なのである。その真実とは、オリエントの都市を知るためには、実際に足を使って歩いてみなければならない、ということである。それはただ、都市の内部がしばしば見せる不潔さに恐れをなしてはならないということだけを意味するのではない。確かに、コンスタンチノーブルを初めとするオスマン帝国の諸都市の衛生状態は、大部分の旅行者を尻込みさせるに足るものがある。しかしそうした問題を別にしても、オリエントの都市を訪れる旅行者は、「目」よりもむしろ「足」を意識的に用いる必要がある。なぜならオリエントの都市は、西洋の都市とは全く異なる独自の構造を持っており、その本来の姿を知るためには、ロンドンやパリを見て回る時とは違う歩き方をしなければならないのである。本稿では、十九世紀前半のオリエント旅行記の中で、こうしたオスマン帝国の都市がどのように描き出されるのか、またその独特な構造は都市を見学する旅行者の視線にどのような影響

ウスによる。

⁵ Maxime Du Camp, *Souvenirs et Paysages d'Orient*, Arthur Bertrand, 1848, p. 253. 「スタンプール」とは、コンスタンチノーブルのヨーロッパ岸にあるトルコ人街のことを指す。

を及ぼすのかという点について、いくつかの問題を検討していきたい。

分割された都市

オリエントの都市の独自性を知るためには、まずオスマン帝国の異民族統治にまつわる問題から検討しなければならない。実際、征服民族であるトルコ人は、その長い歴史の中で、多種多様な異民族をその支配下に組み込んできた。スルタンへの忠節を誓わされた民族の中には、主なものだけでも、アラブ人やベドウィンといったイスラム教徒、ギリシア人、アルメニア人などのキリスト教徒、ユダヤ人などがおり、その他にもレバノンのマロン派やドルーズ、エジプトのコプト人、ペルシアとの国境沿いに住むクルド人などの少数民族を挙げれば枚挙に暇がない。アジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸にまたがるこの広大な帝国は、まさに宗教、人種、言語のるつぼとなっており、多民族性こそがオスマン帝国の最大の特徴のひとつであると言える。

このように多様な民族を一括して統治することは、当然容易な作業ではない。とりわけ宗教上の対立や人種間の衝突は、オスマン帝国政府を最も懸念させた問題であり、帝国をスルタンの権威の下に安定させるために、様々な試みがなされることになる。この異民族統治の難題を前にしてトルコ人が考案したのが、一般に「ミッレット」と呼ばれる社会体制である。このシステムは、帝国の土台を揺り動かしかねない民族間の軋轢を事前に防止するとともに、支配者であるトルコ人への不満をうまく和らげ、オスマン帝国が何世紀にも渡って、多種多様な民族からなる臣民を比較的安定した状態で統治することを可能にさせた。この「ミッレット」体制は、長年オスマントルコの異民族統治法として広く知られてきたが、実はその具体的な運用法に関して、近年歴史学者の間で見直しの風潮がある⁶。それゆえここでは、現在一般に認められている事柄についてのみ簡単に説明しておくにとどめよう。

「ミッレット」体制の本質は、スルタンがその支配下の様々な民族共同体に与えた一種の自治権にある。その正確な起原に関しては不明な点も多いが、

⁶ この問題については次の文献を参照のこと。Benjamin Braude, « Foundation Myths of the Millet system », *Christians and Jews in the Ottoman Empire*, Holmes & Meier, New York, 1982, 2 vol., t. I, p. 69-88. Carter Vaughn Findley, *Bureaucratic reform in the Ottoman Empire, the Sublime Porte, 1789-1922*, Princeton University Press, New Jersey, 1980. L'article de « Millet » de l'*Encyclopédie de l'Islam*, Maisonneuve et Larose, 1991- (huit tomes parus jusqu'au présent).

それでも十五世紀にメフメト二世がコンスタンチノーブルを陥落させた時期まで遡ることは確実である。トルコ人に滅ぼされたビザンチン帝国も征服者であるオスマン帝国と同様、多種多様な宗教、人種からなる臣民をかかえていたが、その統治はうまく機能しているとはいいがたかった。帝国内では、絶えず民族間の争いが繰り返されており、西洋から十字軍とともに封建制度が移入されると、その争いは国家を揺り動かす大問題にまで発展することになる。オスマン帝国の攻撃を受ける以前に、ビザンチン帝国はこうした民族紛争によって大幅に弱体していたわけだが、トルコ人はこの帝国を滅ぼすことによって、その異民族統治の難問をも引き継ぐことになる。スルタン・メフメト二世は、この問題の重要さをよく理解していた。なぜなら祖父メフメト一世の時代に、領土内の様々な民族の対立によって、他ならぬオスマン帝国自体が解体の危機に見舞われたことがあったからである。それゆえメフメト二世は、新たにトルコ帝国に加わった臣民を支配するにあたって、極端なまでに寛容な統治法を取るようになる。こうして宗教の自由を含めた大幅な自治権が、旧ビザンチン帝国の主な臣民であったギリシア人、アルメニア人、ユダヤ人に与えられることになる。

幸いにしてイスラム法であるシャリアは、不測の事態が発生した場合、統治者自身が新たな法を作り出す自由を認めていた。したがってスルタンは、必ずしも臣民のイスラム化を行わなくても、神の法に背くという誹りを受けずに済んだわけである。こうして帝国内の全域で信教の自由が認められ、それぞれの民族はその宗教の下で共同体を形成し、独自の指導者によって自治が行われることになる。各共同体は、トルコ政府への納税と戦時下における派兵の義務だけを負い、共同体内の政治、課税、司法、教育などは全てその指導者にゆだねられた。一般に「ミッレット」と呼び習わされるのは、このようなイスラムの保護を受けた非イスラム教徒の宗教共同体を指す。しかしこうした恩恵は必ずしも非イスラム教徒にのみ与えられたのではなく、クルド人やアンサリア人などイスラム教徒内の少数派、またドルーズやマロン派といったその他の少数民族も同様に自治を許された。この体制は、十九世紀に始まる西洋化改革の時代まで、ほとんど変更を加えられることなく維持されていくことになる。

このようなオスマン帝国の異民族統治の仕組みは、ただ目に見えない体制的なものにとどまっているのではなく、実際に人が生活する都市の相貌にまで大きな影響を及ぼすことになる。オスマン帝国の都市では、各共同体がそれぞれ独自の地区を形成し、都市空間はまさにモザイクのように分割されて

いくのである。実際ほとんどのオリエントの都市には、トルコ人街、ギリシア人街、アルメニア人街、ユダヤ人街といった区分が明確に見られる。各地区にはそれぞれの共同体の特徴が色濃く刻印され、多くの場合イスラム教徒の地区はモスク、キリスト教徒の地区は教会、ユダヤ人街はシナゴグを中心として形成されることになる。各地区ではそれぞれの共同体の言語が話され、都市の住民は、自分が所属する共同体の地区に居住することを求められる。こうしてオスマントルコの都市は、全く性格の異なる地区によって、まるで入れ子のような構造を取っていくのである。

都市の住人の生活にとって、地区は三つの点で重要な単位となる。それはまず人々の習慣の単位である。オリエント社会では習慣を決定するのは宗教である。例えば食習慣ひとつを取っても、そこには宗教の影響が強く見られる。人はその宗教が定める食物しか口にせず、また食物の処理の仕方についても様々な細かい規則があるからである。また冠婚葬祭は、宗教が規定する独自のしきたりによって行われ、人々が日々を送る基準である暦ですら、信仰によって違う。こうした宗教ごとに異なる習慣は、同じ宗教を信仰する人々によって居住される地区ごとに維持されていくのである。

時として地区はまた、職業上の単位ともなる。オリエントの都市では、しばしばひとつの共同体が、ある特定の職業を専門的に請け負うことがあるのである。例えば小アジア西端の海港都市スミルナ（現イズミール）で、この現象が顕著に見られる。ここではアルメニア人がアナトリア東部との交易を掌握しており、ユダヤ人は高利貸しと北方の商業都市ブルサとの貿易を、そして小型船舶を多数所有するギリシア人は沿岸輸送を請け負っていた。こうした共同体による独占的な商業活動は、必然的にそれに従事する人間をある特定の地域に集めることになる。商品の保管、仕事道具の管理、商会事務所の維持といった職業上の要請は、共同体が都市の一角にその活動拠点を持つことを必要とするからである。こうして地区は、中世の西洋に見られたギルドと類似した性格を帯びていくことがある。

最後に地区は何よりも行政上の単位である。先ほども見たように、各共同体はトルコ政府より自治を許されていたが、その自治はほとんどの場合、地区を基本的な枠組みとして行われた。共同体の指導者は、聖職者であったり世俗の富裕な人物であったりするが、彼らは、トルコ政府と共同体の間に立って、行政、治安の管理、課税などの職務を行わなければならない。こうした指導者にとって、管理すべき住人がひとつの区域にまとまっていることは職務を実行するにあたって重要なことであつたのである。また地区はしばしば

司法の役割も担うことがあった。住民の間に生じる小さなめめ事は、外部のトルコの司法権威に頼らず、地区内で解決されたのである。こうして地区は、住民の生活の土台を支える重要な枠組みとして機能していくことになる。

このような独立した地区による都市空間の分化は、確かにオスマン帝国が導入したミット制によるところが大きい。しかしその一方で、それはある程度オリエント古来の伝統でもあることに注意しなければならない。例えばダマスクスやアレppoは、実に紀元前二千年からの歴史を有しており、バグダッドやカイロといった比較的新しい都市ですら、その建設はイスラム暦初頭にまでさかのぼる。これらの都市にとって、オスマン朝時代は長い歴史の中の短い一章に過ぎず、その独特な都市構造の骨格は、それよりはるか以前にすでに生まれているのである。他方で、我々が扱う時代においては、地区間の分化は、都市ごとに異なる変遷を遂げ始めているという点も指摘しておかねばならない。例えば十九世紀初頭のスミルナでは、ギリシア人、アルメニア人地区が次第に外部へと門戸を開き、その民族的な統一性を失っていくのに対し⁷、ダマスクスでは依然その分化は極めて厳格であり、1860年には二万二千人のキリスト教徒がひとつの地区に居住しているのが確認されている⁸。都市空間の分化の有り様については、したがって都市ごとの個別な検討が必要となる。

最後に、オリエントの都市を分割するもうひとつの共同体について触れておかねばならない。レヴァントでは「フランク人」と総称される西洋人のことである。実際いくつかの都市では、非常に古い時代から、西洋から来た商人がある独立した地域を作って居住していたことが知られている。オスマン帝国では十四世紀から、これらの西洋人商人がその外国人の立場によって不利益を被らないよう、様々な恩恵が与えられてきた。通常「カピチュレーション」と呼ばれるこの恩恵は、フランス、英国、ロシアといった国々に治外法権を与え、領事が独自に同国人を管理することを許していたのである。西洋人はそれゆえ、オリエントの都市では「フランク人街」と呼ばれる一角に居住し、帝国内の他の共同体と同じような自治権を享受していたのである。

多民族国家であるオスマン帝国の都市は、こうして複数の相貌を持つことになる。都市空間は様々な共同体によって分割され、それぞれの地区では特

⁷ Voir Marie-Carmen Smyrnelis, « Colonies européennes et communautés ethnico-confessionnelles à Smyrne », *Vivre dans l'empire Ottoman*, éd. par François Georgeon et Paul Dumont, L'Harmattan, 1997, p. 179.

⁸ Voir André Raymond, *Grandes villes arabes à l'époque ottomane*, Sindbad, 1985, p. 178.

定の宗教に基づいた独自の風習で生活が営まれている。まるで複数の異なる都市を寄せ集めてきたか⁹のようなこの構造こそ、オリエントの都市の最大の特徴となるのである。

都市を探索する旅行者たち

オスマン帝国の都市が持つこのような特徴はしかし、オリエントに赴くすべての旅行者によって知覚されるわけではない。当時の旅行記を見る限り、共同体による都市空間の分割の原則に気付いた旅行者はほんの一握りに過ぎない。確かに多くの旅行者が、都市にはいくつかの地区があり、それぞれの雰囲気の違いがあることは漠然と感じてはいる。しかし都市構造がこれほどまで組織的に分割されているという事実は、多くの場合見逃されることになる。ただ意識的に都市を歩き回った少数の旅行者のみがその事実に気が付き、西洋の都市には見られない東洋の都市の独自性を前にして、深い驚きを覚えることになる。その驚きは、次のデュ・カン⁹の一文に最も良く要約されると言えるだろう。コンスタンチノーブルの内奥部まで探索に出かけたデュ・カンは、次のような奇妙な印象を抱いて戻ってくるのである。

見知らぬ、あらゆる国民の地区を抜けて、僕は町へ帰りガラタへと戻ってくる。ユダヤ人街、ギリシア人街、トルコ人街、アルメニア人街と、一時間の間に二十もの異なる国々を駆け抜けるのだ。それぞれの地区には、独自の服装、風俗、相貌、言語があり、ある時、トルコ人女性のけだるい仕草と白いヴェールを目にしたかと思うと、またある時には、通りかかれば大きな笑い声が起り、ギリシアの娘たちの大きな黒い目を見ることになる⁹。

異なる地区に入ると、住民たちの言語や服装、風習などは一変し、旅行者はそのたびに違う国に来たかのような幻覚を覚えることになる。ここでは西洋におけるように、ある都市について全般的な印象を掴むなどということとは不可能である。旅行者が描き出した都市のイメージは、次の地区に入るたびに取り消され、修正され、また新たに作り出されなければならない。「一時間の間に二十もの異なる国々を駆け抜ける」というデュ・カンの巧みな表現は、こうした旅行者の奇妙な感覚を見事に表現している。

テオフィル・ゴーチエもデュ・カンと同様、このオリエントの独自な都市

⁹ Du Camp, *op. cit.*, p. 181. 「ガラタ」はコンスタンチノーブルの西洋人地区のひとつ。

構造を見破った旅行者の一人である。彼は『コンスタンチノーブル』の中で、オスマン帝国の首都の内部に入り込んだ時に感じた不思議な印象について、より詳しく語っている。オリエントの都市を深く探索する旅行者がどのような体験をすることになるのか、しばらくゴーチエのテキストを通して観察してみよう。ゴーチエはある時、シリヴリ・カプシ門という首都の西端で行われる曲芸を見物しに行くことを思い立つ。都市の反対側にあたるフランク人街に居住しているゴーチエにとって、それはコンスタンチノーブルの深奥部に入り込む初めての体験となる。これまでの考察から分かるように、トルコ帝国の首都本来の見どころは、全てその主人であるトルコ人が住む地区に集中している。スルタンの宮殿や、様々な著名なモスク、バザールといったトルコ特有の建築物はトルコ人街であるスタンブールにしかなく、それらを見物するのに勤しんでいたゴーチエは、これまでその他の地区に足を伸ばしている余裕がなかったのである。こうして彼は、現地に長く住むフランス人の友人と共に、コンスタンチノーブルの内奥部へと足を踏み入れることになる。

シリヴリ・カプシ門へ辿り着くためには、フランク人街から金角湾を渡ってトルコ人街へ入り、さらにそれを抜けて延々と歩かねばならない。ゴーチエとその友人は、何度も道に迷いながら、苦勞の末ようやく目的地に到着する。しかしその時にはすでに上演の見どころは終わってしまっていた。空しく芝居小屋を出た彼らは、疲れもさることながら、猛烈な空腹を覚えていることに気がつく。早急に何か食べる物を見つけなければならない。こうして彼らは町をさまよいはじめのだが、この食べ物探しの放浪が、旅行者がめったに訪れることのない地区へと彼らを導いていくのである。

ゴーチエとその友人は、少しでも人通りの多そうな道を選んで進んでいく。しかしあたりはひっそりとしており、とても食べ物にありつけるような気配ではない。ある時不意に、あたりの景色が一変する。それまで見慣れていたトルコの風景は完全に姿を消しているのである。ゴーチエはその時の驚きを次のように語っている。

僕たちが進んでいる地区は全く異なる相貌を呈していた。もはやトルコの外観ではないのだ。家の門は半開きになって、中まで丸見えである。格子の無い窓には、バラ色か青のちりめんをつけ、大きな髪カミの房が頭の周りを王冠のように巻いた魅惑的な女性の頭が現れる。少女たちは敷居に座って自由に往来を眺めており、僕たちが、その繊細で清純な顔だちや青い大きな目、ブロンドの三つ編みに見とれていても、逃げることもない。カフェの前では、白いフスタネラと赤いズボン、飾り紐のついた長い袖の上着を身につけた男たちがラキの大き

なコップを空け、良いキリスト教徒然として酔っぱらっていた¹⁰。

この一文を単なる風景描写として読んでしまつては、ゴーチエが伝えようとする、コンスタンチノーブルをさまよう際の不思議な感覚を汲み取ることはできなくなる。実際ここには、オリエントの都市で地区とともに変化する多くの要素が描かれているのである。まず半開きになった門から家の内部が覗けるなどということは、トルコ人の家ではあり得ない。外部の人間に家の中にいる女性の姿を見せるなどということは、嫉妬深いトルコ人には考えられないことだからである。それなのにあろうことか、ここでは女性たちは、外国人にその面立ちを見せても何の抵抗もない。また住人たちは、トルコ人とは明らかに異なる身なりをしている。オリエント社会では、所属する民族によって服装や髪型が変わることを考えれば¹¹、ここに住んでいるのはもはやトルコ人ではないことは明らかである。何よりも男たちが酒を飲んで酔っていることが、それを雄弁に物語っている。

僕たちはブサマチアという、レイヤ、つまりオスマン帝国の非ムスリム臣民が住む地区にいた。そこはトルコの都市のまっただ中にある一種のギリシア植民地なのだ¹²。

実はゴーチエとその友人は町をさまよっている間に、ギリシア人街へ紛れ込んでしまったのである。オリエントの都市においては、地区が変わることによって、人々の服装から風習、そして何よりもその雰囲気までもが大きく変化する。そこを探索する人は誰でも、一瞬にして全く違う国へ来てしまったかのような幻覚を覚えることになるのである。

二人のフランス人はこのギリシア人街で食堂を見つけ、ようやく空腹を満たすことができる。彼らはそこで肉料理を所望するのだが、その日はギリシアの祝日に当たっているという理由で断られてしまう。何も言わなくてもワインが出てくるといい、この地区では食習慣にもギリシアの風習の影響が強く出ていることが分かる。いずれにせよ、満腹した彼らは、帰路へつく

¹⁰ Théophile Gautier, *Constantinople et autres textes sur la Turquie* (éd. originale, *Constantinople*, 1853), éd. par Sarga Moussa, La Boîte à documents, 1990, p. 201. 「フスタネラ」とはギリシア伝統の男性用スカートのこと。「ラキ」はアニスの香りを付けたオリエント特有の蒸留酒を指す。

¹¹ 民族や宗教によって異なるオリエント人の服装や髪型に関しては、拙論文「旅行者と服装」(『仏語仏文学研究』27号、2003年5月)を参照。

¹² Gautier, *Constantinople*, éd. cit., p. 204.

ため町の北方へと進路を取ることにする。すると今度はエディルネ門を過ぎた辺りで、またしても辺りの風景が一変する。「我々は奇妙で、全く独特の相貌をした地区に着いた¹³。」この地区の特徴は一言で言えば、病的なまでのみずぼらしさである。家や街路の様子、人々の服装にいたるまで、ここでは極端なまでの不潔さと貧しさが支配している。ここはいったいどこなのであるうか。この疑問に作家はこう答える。「我々はバラタ、すなわちユダヤ人街、コンスタンチノーブルのゲットーにいた¹⁴。」ゴーチエの旅行記の編者であるサルガ・ムッサが指摘しているように¹⁵、ユダヤ人蔑視は、この時代のオリエント旅行記に共通して見られる特徴である。ゴーチエもここで、他の多くの旅行記作家に倣い、ユダヤ人地区の住民について偏見に満ちた描写を書き連ねていく。いわく、彼らは利益のためなら、ペストで死んだ人間の服をも持ち去るし、億万の金を溜め込んでいるのにも関わらず、人が捨てる魚の骨を拾って飢えをしのいでいる等々。いずれにせよゴーチエたちが入り込んだのは、一般の旅行者がめったに近付かないコンスタンチノーブルの陰の領域なのである。

ユダヤ人街を出た彼らは、三たび風景が変化していることに気付く。そこに立ち並ぶ建物は優美で、どこか西洋の趣を漂わせている。散策者はほどなくその理由に気がつく。この地区の建物は石造りなのである。大半の建物が木製であり、それゆえ頻発する大火災が名物のひとつともなっているコンスタンチノーブルでは、それは異例なことである。この地区の名前はファナール。オスマン帝国の首都が抱えるもうひとつのギリシア人地区であり、そこには富裕なギリシア人、とりわけ滅亡したビザンチン帝国の支配者の子孫が住んでいるのである。コンスタンチノーブルの「ウェスト・エンド¹⁶」とゴーチエが呼ぶこの瀟洒な地区を抜けた二人の友人は、ようやく活気のある見慣れたトルコ人街へ戻り、そこから疲労困憊しながら宿のあるフランク人街へと帰ってくることになる。

ゴーチエがコンスタンチノーブルの深奥部への探索に割いたこの十数ページのテキストは、注意しなければ、単なる風景描写や事実報告としてしか読まれないであろう。しかしそこには、オリエントという西洋とは異なる世界を旅する旅行者の新鮮な驚きが込められている点に注意しなければならない。

¹³ *Ibid.*, p. 209.

¹⁴ *Ibid.*, p. 210.

¹⁵ *Ibid.*, p. 433, note 1 de page 210.

¹⁶ *Ibid.*, p. 212.

一歩進むごとに、都市は彼の目に全く異なる相貌を見せる。地区が変われば、外観から人々の風習にいたるまで大きく変化する。その印象は、まるでひとつの同じ都市の中にいるとは思えないほどである。旅行者が感じるこうした驚きをよりよく理解するためには、オリエントの都市の独自の構造を知っておくことは有効となる。

揺らぐ都市のイメージ、スミルナ

地区によってその風貌が大きく変化することを考えると、同じオリエントの都市を訪れた旅行者が全く異なる印象を抱いて去るということがあっても不思議ではない。実際、都市のイメージは、旅行者が取る探索の仕方によって大きく変わってくるのであり、ある都市について全く正反対な印象が報告されるということすらあり得る。小アジアの海港都市スミルナはこの点で顕著な例となる。この都市の印象をめぐって、旅行者の間で著しい意見の食い違いが見られるのである。ここでしばらくスミルナを例にとり、都市構造がいかに旅行者の知覚に影響してくるかという点について考察してみよう。

アイオリス人の植民地として建設されたスミルナは、その地理的な利点を生かして古くから小アジアの商業の中心地として栄えてきた。エーゲ海に面した西側は、地中海から西洋へ向かう海の道が開けている一方、アナトリア方面に向いた東側は、隊商が行き来する陸の道が遠くペルシアやインドにまで続いている。こうした恵まれた立地条件によって、この都市には各地から様々な民族に属する商人が集まることになる。早くからスミルナには、オスマン帝国の臣民を構成する主な民族、すなわちトルコ人、アルメニア人、ギリシア人、ユダヤ人が住みついていたが、さらに他の都市とは異なる点として、西洋からも多数の商人がやって来て共同体を形成していた。そのためこの都市はトルコ人から「ジャウール・イズミール」（不信心のスミルナ）と呼ばれることになる。こうした多種多様な民族からなる住民は、オリエントの都市形成の原則にしたがい、それぞれ独立した地区に分かれて居住していた。つまりスミルナは、アンリ・ナユムが称しているように、「オスマン帝国の多民族共同体の構造を最も特徴的に備える都市¹⁷」であったのである。

スミルナは、十九世紀の前半にオリエントを旅する西洋人にとっても重要

¹⁷ Henri Nahum, *Juifs de Smyrne, XIX^e-XX^e siècle*, Aubier, 1997, p. 11.

な寄港地のひとつであった。西洋の港を発った船が初めてアジアの大地にぶつかるのはこの都市であり、またコンスタンチノーブルからエルサレム、エジプト方面へ南下する旅行者や、その反対の行程を取る旅行者にとっても、その中間地点にあたるスミルナは必ず経由する場所であったからである。それゆえ多くの旅行者がこの都市を訪問し、その印象を様々に報告している。

さらにロマン主義時代のフランス文学において、スミルナはある特殊なイメージをまとって想起されていたことをも指摘しておこう。ヴィクトル・ユゴーは『東方詩集』の一編「囚われの女」の中で、ある異国情緒豊かな動物、すなわち象をスミルナの町に登場させている¹⁸。しかしこれはユゴーの空想の産物に過ぎず、実際にはこの町に象が見られたことはかつてない。この例から見て取れるように、当時スミルナは典型的なアジアの都市、オリエントの異国情緒を最もよく体現する都市として考えられていたのである。当時のフランス人がこの都市に対して抱いていたイメージは、次のヴァロンの言葉によく表されている。

いくつかの町や国の名前には奇妙な力があり、それを口にするや否や、空想がかつて下絵を描き、夢想の時間に想像力によって色づけされる景色が目の前に現れることになる。スミルナの名前は、僕自身の印象から他人の印象を判断すれば、アジアの贅沢、オリエントの壮麗さについて意識に語りかけてき、砂漠から来たキャラバンやプラタナスの陰に座ったアラブ人の集団に関する漠としたイメージを心の中に呼び起こす¹⁹。

このように当時のフランス人にとって、スミルナはまさにオリエントを代表する都市であり、その風景はレヴァントにまつわるあらゆるクリシェをまとめて思い描かれていた。この都市が多くの旅行者を引き付けたのは、こうした必ずしも根拠のないイメージの影響も少なからずあったのである。

ところが実際にこの都市を訪れた旅行者の意見は、必ずしも好意的なものばかりではない。それどころか多くの旅行者が、現実のスミルナを前にして大きな失望を覚えている。彼らによれば、オリエント情緒の泉であるはずのこの都市は、あらゆる点で西洋の都市と変わりがないというのである。1806年にスミルナを訪れたシャトーブリアンは、そこでの生活はヨーロッパと全

¹⁸ Victor Hugo, « La Captive », *Les Orientales*, dans *Œuvres poétiques*, éd. par Pierre Albouy, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. I, 1964, p. 621.

¹⁹ Alexis de Valon, « La Turquie sous Abdul-Mejid - I - Smyrne », *Revue des deux mondes*, 1^{er} mai 1844, p. 481.

く同じであると嘆いている。

スミルナでの滞在は、私に新たな変貌を強いることになった。文明の雰囲気を再び身にまとい、訪問を受けたり返したりするはめになったのだ。私に会いに来てくれた商人たちは金持ちで、私がお返しに挨拶に行くと、家には、まさにその朝ルロアの店で最新流行の品を受け取ったばかりであるかのような上品な女性たちがいた。アテネの遺跡とエルサレムの廃墟の間にあって、私がギリシアの船で着き、トルコの隊商とともに去ることになるこのもうひとつのパリは、辛辣なやり方で私の旅行の情景を切り裂いたのだ²⁰。

スミルナはこうして、オリエントの真ん中にぽつかりと出現する「もうひとつのパリ」として旅行者の前に現れる。西洋と同じ暮らしを送る住民たちの生活の特徴は、女性の服装に典型的に現れている。彼女たちが身に付けているのは、パリはリシュリュー街の人気ブティック、ルロアで手に入れたばかりかのような最新流行の品々なのである。これほど遠くまで来て、思い掛けなくもパリの社交界に似た光景を見るはめになったシャトーブリアンは、オリエント本来の異国情緒を求めて、すぐさまスミルナを後にすることになる。

スミルナの町に漂う西洋的な雰囲気を報告するのは、シャトーブリアンだけではない。1835年にはラマルチーヌが次のように語っている。

スミルナは私がオリエントの都市に期待しているものに何も答えてくれない。それは小アジアの岸边にあるマルセイユだ。壮大で優雅な海外出張所であり、そこでは西洋人の領事や商人たちがパリやロンドンの生活を送っている²¹。

比較される都市がパリからマルセイユへ変わっているだけで、ラマルチーヌも結局は、シャトーブリアンと同じ不満を漏らしている。この不満はさらに「スミルナはほとんどヨーロッパのようだ²²」と言う1843年のネルヴァルを経由して、1850年にこの都市を通過するフロベールへと受け継がれていく。「僕たちはアルメニア人とギリシア人の地区を通して入ることになる。ヨーロッパの家々。田舎の小都市に似ている²³。」スミルナが西洋の都市に比較さ

²⁰ François-René de Chateaubriand, *Itinéraire de Paris à Jérusalem*, dans *Œuvres romanesques et voyages*, éd. par Maurice Regard, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1969, p. 923-924.

²¹ Alphonse de Lamartine, *Voyage en Orient*, éd. par Sarga Moussa, Champion, 2000, p. 515.

²² Gérard de Nerval, *Voyage en Orient*, dans *Œuvres complètes*, éd. par Jean Guillaume et Claude Pichois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1984, p. 604.

²³ Gustave Flaubert, *Voyage en Orient*, dans *Voyages*, éd. par Dominique Barbèris, Arléa, 1998,

れる三つ目の例である。しかしここにはもはや、パリやマルセイユといった大都会の華やかさはない。フロベールにとってスミルナは、せいぜいヨーロッパの地方都市ぐらいにしか比べられない貧相な町として映るに過ぎないのである。

こうしてスミルナは、多くの旅行者にとって、西洋とまるで変わらない面白みのない町として現れてくる。はるばるトルコまで来て、ヨーロッパと似たような風景を目にすることになる旅行者の幻滅は大きい。ところがスミルナの町に対して、全く正反対の印象を報告する旅行者もいる。1851年にこの都市を訪ねたゴーチエがその一例である。彼はスミルナについて、「アジアの官能的な魅力を持つ町²⁴」と言い切っている。実際、ゴーチエが町のいたるところで見出すのは、東洋の都市独自の特徴である。彼はこちらでコーランの文句の刻まれた瀟洒な噴水を見たかと思えば、あちらでトルコ人の営む雑然とした商店を見物する。イスラム教徒が礼拝の前に沐浴をしているのを観察したかと思えば、モスクの入り口に履物が山積みになっているのを見て驚きの声を上げる。カフェに入れば、目の前を様々な土地の衣装を着たオリエント人が通り過ぎ、見ていて全く飽きることがないと言う。ゴーチエが語るスミルナはこのように、他の旅行者が報告する「西洋の都市」というイメージとは完全に掛け離れている。

さらに都市の情景を描写するのにゴーチエが用いる表現に着目してみよう。それは、他の旅行者がスミルナについて語る言葉と際立った対照をなしており、場合によってはほとんど挑発的すらある。彼は、目の前を通り過ぎるラクダの行列を眺めては、「ブルヴァール・ド・ガンからは全く遠くにいるのを感じる²⁵」とつぶやき、ヴェールをかぶった女性が宦官に伴われて散歩するのを目にして、「疑いようもなくオリエントが姿を現わしはじめており、どんなに逆説好きの人間でも我々がまだパリにいるなどとは言えないであろう²⁶」と語る。ゴーチエの言葉はこのように、パリをはじめとした西洋の都市にスミルナを比較する多くの旅行者の言辞と真っ向から対立している。ここではパリの風景は比較の対象であるどころか、逆にスミルナの東洋的な雰囲気を実際立たせる対置物として引かれているのである。

同じ都市をめぐる、これほどまで異なる印象が報告されるのは一体なぜ

p. 518.

²⁴ Gautier, *Constantinople*, éd. cit., p. 79.

²⁵ *Ibid.*, p. 72.

²⁶ *Loc. cit.*

なのであろうか。その理由は、当時のスミルナの地図を見れば一目瞭然に分かる²⁷。それはまさにこの都市の独自の構造に由来するのである。差し当たり、スミルナの都市空間がどのようなものであったかを知るためには、ミシヨーとプジュールによる『オリエント通信』の中の次の文章が有効であろう。

スミルナという都市は、山の手と下町という二つの部分、ないし二つの大きな地区に分割される。前者にはトルコ人とユダヤ人が住み、後者にはギリシア人、アルメニア人、フランク人が住んでいる。下町にはかなり美しい建物や、普請の相当良い家があり、市場、バザール、商店がある。海に近いことや、到着したり出発したりする人の群れによって、都市のこちら側には常に活気がある。スミルナの全てのざわめきと活動はこちらの地区にある。トルコ人の広大な墓地に隣接している山の手には、沈黙と孤独が支配している²⁸。

スミルナの町はこのように、全く異なる二つの顔をあわせ持っているのである。海側の下町地区には、スミルナの都市機能の全てが集中している。そこは商業活動の中心であるとともに、行政地区でもあり、昼も夜も多くの人が行き交っている。こうした賑やかな下町地区に隠れる形で、海から離れた傾斜面に山の手地区がひっそりとある。そしてスミルナでは、海側の下町がキリスト教徒地区、山の手がトルコ人とユダヤ人地区に区分されているのである。多くの旅行者がスミルナについて、西洋風の町であるという印象を抱いたのはまさにこのような理由による。

繰り返すが、スミルナをめぐる少なからぬ旅行者が片寄った印象を抱くのは、都市空間が共同体によって明確に分割されていることによる。スミルナは決して西洋的な都市であるわけではない。そこにはゴーチエが観察したような、オリエントの都市としての特徴も間違いなく存在しているのである。しかしそのような特徴は、必ずしも都市を訪れる全ての旅行者によって知覚されるわけではない。下町地区の活気に惑わされた旅行者は、多くの場合それが都市の全体であると思い込み、その背後に全く異なる相貌を持つトルコ人街やユダヤ人街が隠れていることに気付かない。スミルナの町を隅々まで歩き回ったゴーチエはその特殊な構造を理解していた。彼は町を離れる際、スミルナを二分する二つの地区をひとつのメダルの両面に例え、よりみずぼ

²⁷ 十九世紀のスミルナの都市構造を知るためには、次の著作に所収されている地図が有効である。Démétrius Georgiadès, *Smyrne et l'Asie mineure au point de vue économique et commercial*, Imprimerie Chaix, 1885.

²⁸ Joseph Michaud et Joseph Poujoulat, *Correspondance d'Orient*, Ducolet, 1833-1835, 7 vol., t. I, p. 203-204.

らしい山の手地区についてこう言っている。「メダルの裏面を隠してしまつたら不公平になるであろう²⁹。」このスミルナの二重構造は、同様にヴァロンによつても知覚されている。彼は、都市を構成する二つの地区の相互関係について次のように言っているのである。

コンスタンチノーブルと同様スミルナは、トルコの町であると同時にヨーロッパの町でもあるのだが、東洋と西洋のこれほど異なる性格はそこではほとんど混同されることはない。ヨーロッパとアジアはここでは互いに混じりあうことなく、仲良く隣り合わせになって暮らしているのである³⁰。

スミルナをめぐる印象がしばしば旅行記作家によつて揺らぐのは、こうした事情による。旅行者の眼差しは、知らず知らずのうちに、オリエントの都市構造の影響を受けているのである。このように、同じ都市を訪ねた旅行記作家が、しばしば全く異なる印象を報告することになるのは、オリエント旅行記に特有のひとつの興味深い現象であると言える。

地区の越境、旅行者とアイデンティティ

西洋の都市とは全く異なる構造を持つオリエントの都市は、旅行者の探索の仕方によつてその相貌を大きく変える。都市の全体像を知るためには、旅行者はしたがって、意識的に足を使って歩き回る必要があるのである。しかし他方でまた、旅行者の行動は、他ならぬその都市構造そのものによつて制約を受ける場合もある。滞在中の居住地の問題がその顕著な例である。共同体によつて居住空間が厳密に規定されているオリエントの都市では、旅行者は自分の好みによつて自由に宿泊先を決めることができない。旅行者は自分が属する共同体、すなわち西洋人に割り当てられた地区に住むことを求められるのである。もしこの不文律を破って、他の地区に住もうとすれば、旅行者は直ちに大きな不便を忍ばねばならないし、時として身の危険にさらされる場合すらある。それまで旅行者の印象に作用するだけであつたオリエントの都市構造は、こうしてその行動にも重大な影響を及ぼし始めることになる。ここではこうした都市構造と旅行者の行動の関連について、いくつかの興味深い問題を考察してみよう。

²⁹ Gautier, *Constantinople*, éd. cit., p. 79.

³⁰ Valon, « La Turquie sous Abdul-Mejid - I - Smyrne », art. cit., p. 490.

この時代、ある都市に到着した西洋人旅行者が最初に足を向けるのは、同国人が住むフランク人街であった。レヴァントで活躍する西洋人商人の居住空間として発展したフランク人街は、様々な理由で旅行者にとって貴重な空間となっていたからである。まずそこには西洋人の経営するホテルがあり、西洋の食事を供する食堂がある。オリエントの生活習慣に慣れていない旅行者にとって、住と食の面で母国の習慣を保つことができるのは重要である。またそこでは主にイタリア語が話され、意志の疎通も比較的容易である。西洋とはあらゆることが異なる国を訪れる旅行者にとって、こうしたフランク人街の存在は、物理的にも精神的にも旅行の苦勞を軽減してくれる便利な場所として現れてくるのである。この時代に書かれた旅行ガイドの多くが、旅行者の最初の目的地としてフランク人街を挙げているのはこのためである³¹。

フランク人街の訪問とそこへの投宿は、それゆえ大半の旅行者が行う一種のルーチンワークであった。都市に到着した彼らは、まずこの地区に滞在拠点を定め、慣れ親しんだ雰囲気の中で、ゆっくりと町を探索する準備を行うのである。しかし旅行者のこの一連の行為は、必ずしも彼らの自由意志だけによって行われていると考えてはならない。共同体が都市空間を分割しているオリエントにおいては、西洋人旅行者が居住することができるのは、事実上フランク人街以外にあり得ないのである。言い換えれば、オリエントの都市に到着した旅行者が判を押したようにフランク人街へと足を向けるのは、決してその地区が提供してくれる様々な便宜のためだけではなく、他に居住する場所がない以上やむを得ないという事情もあるのである。

それではオリエントを訪れる西洋人旅行者は、必ずフランク人街にとどまらなければならないのであろうか。何らかの目的のために、他の共同体の地区に住居を求めるということは不可能なのであろうか。これらの疑問は、二つの理由によって、実際に旅行者の頭を悩ます問題として現れてくる。まずフランク人街は、その特有の雰囲気によって、しばしば旅行者に疎まれることになる。確かにこの地区が旅行者に与えてくれる便宜は貴重なものである。フランク人街に居住することによって、旅行者が異国で感じる疎外感は大幅に緩和されるからである。しかしそのこと自体が時として、逆にこの地区の短所となることもある。西洋的な雰囲気を持つフランク人街は、旅行者がオリエントに求める異国情緒に全く答えてくれないのである。ネルヴァルは『東

³¹ オリエントの都市に到着する旅行者とフランク人街の関係については、拙論文「Le Débarquement en Orient, Formalités de séjour et identité des voyageurs au Levant dans la première moitié du XIX^e siècle」(『仏語仏文学研究』26号、2002年11月)を参照。

方紀行』の中で、コンスタンチノーブルのフランク人街のひとつであるペラの様子を次のように描写している。

修道院と道の反対側に広がる緑地から先は、完全にパリの一角にいるみたいだ。モードの店や宝石商、菓子屋に下着屋が華やかに立ち並び、イギリスホテルやフランスホテル、貸本屋やカフェが四半里の間ずっと続いている³²。

旅行者がはるばるオリエントまでやって来たのは、このようなパリの風景に親しむためではない。彼らが観察したいと願うその土地独自の風物や建物は、西洋人地区であるフランク人街には存在しないのである。

それでは旅行者の好奇心を引くオリエント本来の風景はどこで見られるのか。言うまでもなく現地人の地区である。二つ目の問題が生じるのはこの点である。もしフランク人街と現地人の地区が互いに隣接しているのであれば問題はない。しかし二つの地区が遠く掛け離れている場合は、旅行者は見物のたびに、大きな移動の不便を忍ばなければならなくなるのである。コンスタンチノーブルがまさにこの場合に当たる。フランク人街であるペラとガラタは、都市の見どころの集中するスタンブールと金角湾を隔てており、トルコの都市本来の特徴を目にするためには、旅行者はわざわざ海を渡る必要があるのである。ゴーチエは毎日の移動の苦勞を、友人のルイ・ド・コルムナンに宛てた手紙で次のように嘆いている。

僕は朝から晩までコンスタンチノーブルの大きな村を走り回っている。ここではミナレットひとつを見るために何里も移動しなければならないのだ。とても疲れる。ヨーロッパ人はペラにしか住むことはできないし、ペラからトルコ人街まではマドレーヌからバスティーユほども離れているので、なおのことだ³³。

このような不便は、旅行者がフランク人街に居住している限り避けて通ることはできない。したがって旅行者が、西洋の町並みしか見せないフランク人街を離れ、オリエントの風景に直に触れることができる現地人の地区に移り住もうと考えても、全く不思議はないのである。

しかし現実的には、オリエントの都市で自分の所属する共同体の地区以外

³² Nerval, *Voyage en Orient*, éd. cit., p. 613.

³³ Lettre de Théophile Gautier à Louis de Cormenin, Constantinople, 5 juillet 1852, *Correspondance générale*, éd. par Claudine Lacoste-Veysseyre, Droz, 12 vol. t. V, 1991, p. 71. 「ミナレット」とはモスクに附随する尖塔のこと。その上から日に五回、人の声によって祈りの時間が告げられる。

に住むことは難しい。共同体による都市分割の原則は極めて厳格であり、たとえ旅行者であろうと越境して居住することは許されないのである。しかし中には、このオリエントの都市の不文律を破り、何が何でも現地人の地区に住もうと努力する旅行者もいる。ネルヴァルの『東方紀行』の主人公がそのよい例である。カイロで、またコンスタンチヌープルで、作家の分身とも言えるこの人物はフランク人街を抜け出て現地人の地区に潜り込もうとする。その度に彼が引き起こす騒動は、このような行為がいかにオリエントでは常識はずれと見られるかということをよく表している。ここで、ネルヴァルが『東方紀行』の中で語っているこれらのエピソードを通して、オリエントの都市構造の影響が文学作品の中に織り込まれてくる例を検討してみよう。

カイロの町に到着した『東方紀行』の主人公は、まずフランク人街のフランスホテルに宿を取るが、数日でその住まいに嫌気が差してしまう。エジプトの物価はフランスより数倍安いはずなのに、宿泊賃は非常に高い。また何よりもその西洋と変わらぬ雰囲気によって、オリエントの旅情は台無しになってしまう。何しろホテルの二階にはピアノがあり、一階にはビリヤード台が設えられているのである。「これではマルセイユを出ていないのと同じだ³⁴」とこぼす主人公に対し、現地のドログマン（通訳兼ガイド）であるアブダラは名案を授ける。彼は、ホテルを引き払い町中に一軒家を借りることを提案するのである。そうすればホテルに滞在するよりはるかに安くつくし、希望通りに東洋風の暮らしを送ることができると彼は請け合う。アブダラの提案を受け入れることにした主人公は、早速彼に案内してもらい、ギリシア人街やコプト人街で家探しをすることになる。通訳がキリスト教徒の住む地区を選んだのは、西洋人旅行者の住居としてより問題が少ないと判断してのことであろう。いずれにせよコプト人街に一軒よい家が見つかり、主人公はただちにホテルを引き払ってそこに移り住むことにする。

しかしながら現地人の地区に住むという主人公の希望は、必ずしも容易に叶えられるものではない。引っ越して来た翌日、彼は早くも地区のシャイフ（長老）の訪問を受け、家から立ち退いてもらいたいと告げられるのである。当惑した主人公が理由を問いただすと、彼は妻帯していないのでこの地区に住むことができないのだと言う。結婚していないのだから当然だという主人公の反駁は、聞き入れられない。シャイフに代わってドログマンがこう事情を説明するのである。「あなたが結婚していようがいまいがそれは彼には関係

³⁴ Nerval, *Voyage en Orient*, éd. cit., p. 272.

ありませんよ。彼が言うには隣人は妻帯しているし、あなたに妻が無ければ不安に思うだろうとのことなのです。それに、それがこの習慣ですからね³⁵。」主人公はこのように、コプト人街に一步足を踏み入れたと同時に、西洋的な常識は全く通用しないことを悟る。オリエントの都市で現地人の地区に居住しようとすれば、その地区の共同体の習慣と常識に従って生活することが求められるのである。こうして彼は、猶予として与えられた一週間のうちに妻となる女性を探してくるか、あるいはコプト人街での生活を諦めてフランク人街へ戻るかという二者択一を迫られることになる。

実はこのエピソードの信憑性については、やや疑わしい点がある。彼が父親に宛てた手紙からも確認できるように³⁶、ネルヴァルがコプト人街の家に移り住んだことはおそらく事実である。しかし妻帯していないことを理由にこの地区から追い払われそうになったという挿話は、英国人オリエント学者のウィリアム・レインの著作から想を得た作り話である可能性が高いのである。実際レインは、ネルヴァルのエジプト滞在以前に出版した『現代エジプト人の作法と習慣』の中でほぼ同様のエピソードを紹介しており、しかもそこで、未婚を理由に西洋人がこのような扱いをされることはもはやないと断言しているのである³⁷。しかし挿話の信憑性がどうであれ、ここで注目しなければならないのは、西洋人が現地人の地区に移り住めば、地区の住人たちに大きな困惑をもたらすことになるという点である。なかなか妻となる女性を連れてこない物語の主人公に苛立ち、地区のシャイフは次のように嘆く。

「マッカラー！」彼は頭を叩いてこう叫んだ。「それを考えていなかった。ああ、この地区にフレンギがいるとは何たる巡り合わせか！法に従うためにあなたには一週間を与えたはずですよ。もしあなたがイスラム教徒であつたら、妻の無い男なんぞ、オケル（旅人宿ないし隊商宿）にしか住めないのですよ。ここに居てもらわねえはいきません³⁸。」

このシャイフの嘆きによって、我々の旅行者の行為がいかに関地の常識から逸脱しているかが分かる。人は自分の所属する共同体の地区に住まなければ

³⁵ *Ibid.*, p. 275.

³⁶ 「僕たちはコプト人街に、一日につき一フラン二十五サンチームで全て整った家を見つけました。」(Lettre à son père, le Caire, 14 février [1843], *Œuvres complètes*, éd. cit., t. I, 1989, p. 1391).

³⁷ Edward William Lane, *An account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians* (première édition, 1837), 5^e édition, John Murray, Londres, 1860, p. 155-156.

³⁸ Nerval, *Voyage en Orient*, éd. cit., p. 311.

ならないという習慣は揺るがしてはならないものであり、もしその不文律を破るのであれば、少なくとも、地区の共同体の一員としてその慣習に従うことが求められるのである。

コプト人街にとどまることを望む主人公は、それゆえ同居してくれる女性を探さねばならない。様々な人にエジプト人女性を紹介してもらうが、なかなかよい花嫁候補には巡り合えない。結局、彼は奴隷市へと出かけていき、女奴隷をひとり買い求めることになる。この女奴隷との共同生活は、他の旅行記作家には見られないネルヴァルの旅行記の大きな特徴となるのだが、こうした独自の体験は、全てフランク人街から出て地元の人々の地区に住もうとしたことから由来しているのである。

カイロで引き起こした騒動にも懲りず、『東方紀行』の主人公はコンスタンチノーブルでも、現地民の地区に居住しようと試みる。エジプトの首都でコプト人街に家を借りたのは、単に東洋風の暮らしをしてみたいという単純な動機からであった。しかし今回はより具体的な目的のために、再び土地の慣習を破ることが目論まれる。というのも彼がオスマン帝国の首都に到着した時期は、ちょうどイスラム教最大の祭典であるラマダンの始まりに当たっていたのである。夜を徹してトルコ人地区では華やかな祭りが行われるのだが、それを見物することは西洋人には許されていない。フランク人街をトルコ人街から隔てている金角湾の横断は、日没とともに禁止されてしまい、夜間トルコ人街を訪問することは不可能であるからである。西洋人に許されていることといえば、せいぜい、光り輝くトルコ人街を対岸から眺めることだけである。はるばるコンスタンチノーブルまで来て、その最も華やかな瞬間を見ることができないのはあまりに惜しい。こう考える主人公は、何とかトルコ人街であるスタンプールに居住する手立てがないか、方策を探し始めるのである。

彼はまず当地に長く住むフランス人の画家に相談しに行く。しかし旅行者の常識はずれの希望を叶える手段は、画家には思い当たらない。そこで二人は連れ立って、画家の友人のアルメニア人商人に意見を求めることにする。しかしこの商人の答えも同様である。主人公の考えは不可能なこととして直ちに退けられるのである。

スタンプールに住むという僕の考えは、当初彼には非常識なことに思えた。いかなるキリスト教徒もそこに住居を構える権利はないからだ。許されているのは、日中に訪問することだけである。キリスト教徒相手ではホテルや旅館はおろか、隊商宿すらない。例外が適用されるのは、アルメニア人、ユダヤ人、ギ

リシア人といった帝国の臣民だけである³⁹。

スルタンのお膝元であるコンスタンチノーブルでは、共同体による地区の分割はカイロよりもはるかに厳格であり、越境することはほぼ不可能に見える。キリスト教徒である限り、トルコ人街に居住することは許されないのである。それでは発想を転換して、キリスト教徒であることをやめれば、この不可能事が可能になるのではなからうか。すなわち自分はイスラム教徒であると偽れば、トルコ人街に紛れ込むこともできるのではないか。主人公が提案するのは、こうした身分の詐称である。このような巧妙な手口を聞かされて、アルメニア人も最後には、それは実現可能だと認めることになる。

しかしながら僕は自分の考えに固執し、カイロでは、現地の服装をしてコプト人として通すことで、フランク人街の外に住む手段を見つけたと言ってやった。「そうだ！」彼は言った。「ひとつだけ方法があります。ペルシア人の振りをするのです⁴⁰。」

アルメニア人が言うには、スタンプールには「イルディス・カン」という名の隊商宿があり、そこにはありとあらゆる宗派に属するイスラム教徒の商人が集まるといふ。それゆえ西洋の言語さえ話さなければ、変装をしてそこに潜り込んでも人目を引くことはないであろうというのである。

こうして旅行者は服装を全て取り替え、コンスタンチノーブルに商品を仕入れにイラクからやって来た商人として振る舞うことになる。オリエントの都市では居住する地区を変えるためには、時としてこのように、自分のアイデンティティまで変える必要がある。しかもこうした身分の詐称は、信仰に関わることであるだけに、もし発覚した場合、身に危険が及ぶことすらある。それゆえあらゆる旅行者にとってこうした行為が可能であるわけではないが、危険を冒して現地人の地区に潜入する人物は、確かに普通の西洋人には見ることでできない光景を目にすることになる。ペルシアの商人に扮して、ラマダンの祭りが行われる夜のトルコ人街を闊歩する『東方紀行』の主人公は、次のようにつぶやく。「ペラの高台から眺める人にとって、町は壮麗に輝いているように見えるが、内部の街路は僕の目にさらにまばゆく見えた⁴¹。」こうして彼は、独自の工夫と、またそれなりの勇氣によって、現地人しか見るこ

³⁹ *Ibid.*, p. 636.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 636-637.

⁴¹ *Ibid.*, p. 638.

とのできない都市の真の相貌を間近で観察することに成功するのである。ネルヴァルが語るこれらのエピソードは、西洋の都市には見られないオリエントの都市構造の特異性をモチーフとして、二つの文明の違いをユーモラスに提示している。

結 論

オリエントの都市を訪れる旅行者の視線は同一ではない。誰もが同じような立場から同じような風景を見ることができるとは異なり、東洋の都市は、訪問者の探索法によって、その相貌を大きく変える。様々な共同体によって分割された都市空間は、それぞれの地区ごとに全く異なる趣を見せる。したがって意識的に「足」を用いる旅行者は、「目」だけを頼りに見物しようという旅行者とは全く異なる風景を目にする場合もあるのである。こうして旅行者の視線は個人性を帯びていく。ある都市をめぐる眼差しは、旅行者ひとりひとりによって異なり、その視線の相違は彼らがつづる旅行記の中へ、直接的、間接的に反映していく。都市空間をめぐるディスクールには、こうして旅行記作家の個性が深く刻印されることになるのである。

結局のところ、オリエントの都市をどこまで深く知ることができるかということは、旅行者個人の器量にかかっていると言ってよい。いくら学識があり、また外国旅行の経験に富んでいる旅行者であっても、ひとつの地区にとどまっていたのでは、都市について片寄った知識しか持つことができない。ある都市についてより深く理解しようとするのであれば、都市が一般の旅行者の目から隠しているものを暴こうという意志が必要となるのであり、その意志を持つことができるかどうかは、あくまで旅行者の個人的な資質にかかっているのである。本稿を締めくくるに当たり、この旅行者の資質という点に関して、ある興味深いエピソードを紹介しよう。シャトーブリアンは、彼が行ったオリエント旅行にジュリアン・ポトランという名の従僕を同行させていた。主人の旅行のほぼ全行程を共にしたジュリアンは、帰国後、主人のすすめによって彼自身の体験を記録に残している。教養があるとはいいたいこの従僕の旅行記には無数の文法や綴り字の間違いがあるが、シャトーブリアンは後に『墓の彼方の回想』を執筆する際、オリエント旅行に関してジュリアンの旅行記を参照することになる。その中でとりわけ我々の興味を引くのは、ジュリアンが控えめながら、主人であるシャトーブリアンの旅行方法に不満を述べている一節があることである。コンスタンチノーブルでの

滞在に関して、従僕は次のように語っている。

私はもっと長くそこにとどまり、町をもっと十分に見たいと思いました。とりわけ大使様のお世話をしているフランスの方々全員と共にいたからです。しかし私はいくつかの地区しか見ませんでした。特にトルコの町で常に最も美しく最も快適なフランス人が住んでいる地区です。トルコ人が住んでいるその他の地区は、大都市でも小都市でもそれほどきれいではないのです⁴²。

ジュリアンはこのように、フランク人街にとどまり、フランス人とはしか交流しようとしないう主人の旅行の仕方を残念に思っている。彼個人としては、現地人の住む地区を訪れて、きれいとは言えないがフランスでは決して見ることのできない風景を眺めてみたいと願っている。しかしそれは従僕という彼の身分では許されないことである。アメリカとオリエントという二つの大陸を旅し、西洋における東方旅行ブームの火付け役ともなったシャトーブリアンにしても、オリエントの独特な都市構造を前にして、片寄った都市の見方しか取ることができなかった。それに対して、しがたない従僕に過ぎないジュリアンが、東洋の都市をよりよく理解するための資質を秘めていたとは皮肉なことである。

⁴² *Voyage de Julien à Jérusalem*, dans Chateaubriand, *Itinéraire de Paris à Jérusalem*, éd. cit., p. 1519.